

く別院だよりく

## モダン寺新聞

第29号

発行所

浄土真宗本願寺派 本願寺神戸別院  
〒650-0011  
神戸市中央区下山手通八丁目一番一号  
TEL 078-341-5949



焼香の参拝者。前知事の貝原別院総代も参詣

阪神・淡路  
大震災

## 『忘れる事なき日』

十四年目の「一七」

死者・行方不明者六千四百四十名、  
負傷者四万三千七百九十二名という、  
未曾有の被害を出した『阪神・淡路  
大震災』より十四年。

それぞれが、それぞれの想い、場所、  
方法でこの日を過ごされたことと思  
います。

今日では震災前の街並みを取り戻  
しつつありますが、私たちは十四年前  
の出来事を忘れることは決してあり  
ません。

今年も例年の通り、一月十七日、本  
願寺神戸別院で、『阪神・淡路大震災  
物故者総追悼法要』が修行されました。

午後一時半より始まった法要では、  
輪番が表白で

「震災により物故された方々の想  
いに心をはせ、そのご生前を偲びつつ、  
参集下さった有縁の方々と共に、深く  
如来の大悲のお心を聞き、人の世の無  
常をかみしめ、お念仏もろとも力強  
く生きて参ります」と述べました。

お勤めの後には『あなたは何によつ  
てささえられていますか』というテーマ  
で、作文が朗読されました。

兵庫大学 川崎佳子さんは、夕暮  
れ時の小鳥のさえずり、朝刊の届く

音、亡き母の植えた琵琶の木、その琵琶  
の花蜜を吸いに来たメジロなど、鋭  
敏な感性でもって捉えた日常の一コマ  
に、目には見えないが確かに感じる大  
きななはたらきを、読みあげて下さいま  
した。

須磨ノ浦女子高等学校 前本絢子  
さんは、家族の存在、友人と一緒に過  
ごす時間、何気なく食べている食事等、  
当たり前の様に思っている日常が、実  
際は驚くべき多くの善意と、はたらき  
によって支えられていること、そしてそ  
の事実が気付くこと、感謝していくこ  
とを話されました。

作文朗読に引き続き、午後二時四  
十五分より、「いのち」を考える研修  
会が開催されました。

今年は、『がんばれ仏教！』や『生き  
る意味』等々の著者であり、日本仏教  
の再生に向けて働きかけ、広く社会に  
向けてメッセージを発信しておられる、  
文化人類学者・東京工業大学大学院  
准教授、上田紀行氏をご講師にお迎  
えしました。

講演は、『慈悲の記憶が「いのち」を  
支える』と題して進められ、現代では  
生きる意味が不明確となりつつあり、  
生きる意味を立て直さなければなら  
ない。

(二面の下段へ続く)

# 大切な法縁を伝えて

## 別院報恩講勤修

十一月二十七日(木)から二十九日(土)の三昼夜に渡り、神戸別院の報恩講法要が勤まりました。

報恩講とは、『阿弥陀様のお慈悲にあわせていただき救われていく人間になっていく教え』・『お念仏(南無阿弥陀仏)のみ教え』をお伝えくださった、『親鸞聖人』のご生涯を偲び、阿弥陀様の御恩をお聞かせいただき、その御恩に報いていく念仏者のつどい(講)のことです。



蠟燭の灯りでの御伝抄拝読

様々な法要の中でも、浄土真宗の門徒にとつて、もともと大切で親しみのあるものであり、報恩講を通して、阿弥陀様の大悲をきかせていただく、大切な法縁であります。

二十七、二十八日の初夜法要(夕方からの法要)では、本堂左余間に奉獻された『御絵伝』(四幅の掛け軸に親鸞聖人の御一代を描いたもの)の絵解きのスライドと共に、内陣の菊灯・輪灯と蠟燭の灯りだけの、厳肅な雰囲気の中で、『御伝抄』が拝読されました。

### 阿弥陀様の御前で

また、今年の報恩講では、当別院を会場として初めて『帰敬式』が行われました。

式では受式者代表として姫路東組浄福寺門徒 山本英輔さんが『ただいま仏祖の御前で帰敬式をうけ 浄土真宗の門徒としての自覚



### (一面より続く)

そして、いのちの尊さを年長世代が伝えていかなければいけない、と現代社会に対する、いのちの意味の再生へ向けての提言をなされました。

そして、その中で仏教が果たす役割が非常に大きい、と述べられ、自著にて提唱されている『仏教ルネッサンス運動』等を背景にしつつ、自身の出会った僧侶より学んだことや、ダライ・ラマ法王に出会った感想、法王の話された、慈悲より生じる社会的な不正に対する怒り、その『慈悲より生じる怒り』から起こる仏教者としての行動について等、二十一世紀という風に我々の仏教は復活していけばいいのか、今後の社会における仏教の果たすべき役割は何であるのか、について語られました。

最後には、「良き種を蒔いていけば必ずそれはどこかで芽が出て、育っていくのです。そのことを確信するというのが仏教徒の根幹にあるのです。たしかに、その良き種が芽を出したり花を咲かしたりするのは、次の世代かも知れません。しかし、私がまず、日々良き種を蒔いていくということ、が、必ずや良き未来を作り出していくんだと確信していく。」



公演中の上田紀行氏

慈悲というものから行動をしていくということ、そうした仏の道から行動を示していくということが、亡くなった方々への思いに報いる一番の法要になるのではないだろうか。

ぜひ良き日本を創り上げていきたい、そしてこの良き世界というものに対して発信して行きたいということを、この一月十七日にお話させて頂きました」と結ばれました。

講演終了後には、上田先生の著作、『がんばれ仏教!』等の書籍の販売も行われ、書籍や先生のサインを求める人々で、行列ができる程でした。





五十二名のご門徒が『おかみそり』を受けました

をあらたにいたしました 宗祖親鸞  
聖人のお流れをくみ 阿弥陀如来の  
ご本願に救われることは 何ものにも  
もかえがたい喜びであります この  
上はますます聞法にいそしみ 真宗  
念仏者の本分をつくし 報恩謝徳に  
つとめます』

と、帰敬文を拝読され、播磨東組  
西入寺門徒 船津眞由美さんが代  
表として、法名を拝受されました。

この度の帰敬式では、新たに五十二  
名が仏弟子としての名前『法名』を  
頂かれ、浄土真宗の門徒としての新

しい一步を踏み出されました。

また、帰敬式の時間、受式されない  
方の為に一階のホールで、大分県・県  
南落語組合の三浦芳行さんによる落  
語の席が設けられ、高座の上で話さ  
れる囁に、会場は笑いの渦に包まれて  
おりました。

## 無量寿・無量光

ご法話のご講師には、大阪教区讃  
良組自然寺より、加藤順教先生をお  
迎えました。

大速夜法要のご法話の中で…

阿弥陀という言葉は、インドの『ア  
ミタース』と『アミターバ』という言  
葉を重ねたものでして、中国の人は  
アミタースを『無量寿』『アミターバ  
を『無量光』と訳されました。

我々の認識している時間の流れ、感  
覚なんてものは、実際は大した事ない  
んではないでしょうか？

よく考えてみたら、私ら自分のい  
のちの始まったことすら知らないので  
しょ。ただ、親に教えられて何年何  
月何日が誕生日だと言われたこと  
であつて、そのところ、生まれたと  
きの事なんて認識していないんじゃない  
ですか？

しかし、その時の記憶がなかったら  
あなたが存在しないかと言ったら、そ  
んな事はない。

考えてみたら、私が私を認識して  
る先から私は私でここに居る、とい  
う…。

人間なんて他愛がない、そんなこと  
すら気が付かない、自分が生まれてき  
たことすら認識できていない。それど  
ころか、おっぱいを飲ましてもらった  
事、おむつを替えてもらった事も憶え  
ていない。

それで、我々が認識できてないから  
それで終わりとは言わない。死んだ  
らしまい、つていうことは私が認識で  
きてないだけで、死んだらしまいとは  
言えないにもかかわらず、私、自分と  
いうものを、それでしまい、とえらそ  
うな顔をして言いきつてしまう。そう  
じゃない。

無量寿とはどういうことかな、とい  
うことを言いますと『無始無終』、い  
つ始まったか判らないいつ終わるか  
も判らない時の流れのことを無量寿  
という。

無量光、それは光のことですが、光  
の照らし出す場所である空間、無量  
の空間、とてつもない大きな大きな  
我々の認識を超えた空間のことです。



満堂の中でのご法話

考えてみたら、私たちがわかつて  
いる事、見えているものなんて、そ  
んなに大したものが見えていない、  
わかつているわけではない。自分が  
知っていることなんて、ほんとに些  
細なことしか知らんですよ。

そして、知らんけど知ってるよう  
な気がしてわかった様な気がしてい  
る…こうした虚妄分別で見ている  
からちゃんと見えてない。

私達、人を見て『いい人』『悪い  
人』といますが、ほんとにそうで  
しょうか？

本当は上に一言抜けている。『私の都合の』いい人、『私の都合の』悪い人、なのではないですか。

考えてみたら人間なんてそんなことで人を見ているから、ろくすっぽ真つ当に見えとらせんの、それが真つ当に見えたと思うておる。

そんな私達に、仏様の世界、無量寿・無量光のいのちの世界はわからないけれど、無限の無始無終の時を離れ、我々の認識できない宇宙空間、空間の中にはたらいている大きな営み

のことをブッダと言う。ブッダとはお慈悲のこと。

『智慧と慈悲』がこの宇宙空間の中に厳然としてはたらいているよ、と伝えてきているのが『阿弥陀仏という名のり』、その象徴表現が阿弥陀仏なんです。

大地というのは凄いですね。いい花だけ育てるのではない、人間にとって都合のいい花だけでなく、都合の悪い花までしっかりと育てる。

それこそ、名もない雑草もしっかりと育てていきます。そこには何の分別もない。

仏様の智慧のことを『無分別智』と申します。分別がなく立派なありよう、どのものにもすべて素晴らしいのちがあると思える目。

私達は自分の都合で、「こんな草」というけれど、草だつていのちだよと、きちつと見ている目。

そういう意味で言うと、今日ここにきておられる皆さん方、如来様からきつと見抜かれております。なんぼいい服を着

ていても阿弥陀様から見たら素っ裸、全部見抜かれている。

見抜かれた上で、見抜いた上で、どのいのちも捨てておくか、必ずや必ずや真つ当ないのちに成さしめるで、安心して生きろよとおっしゃって下さっている呼んで下さっているのが、南無阿弥陀仏だよとおっしゃって下さっている…。

## 手作りの味

法要の合間には、別院仏婦のお世話によるお斎の接待もあり、参拝者は温かい汁物と、心尽くしの料理に舌鼓を打っておられました。

参拝者の中には「法話の合間のお斎が楽しみでお参りさせて頂きました」と申される方も。

別院職員もお斎をいただき、手作りの味に、何とも言えない懐かしさと暖かさを感じながらの時間を共にし、心のこもった食事の中での仏縁をいただきます。

非常に多くの方々のご懇念と、温



お斎の時間は沢山の人で賑わいました

かいご協力のお陰で、今年も無事に報恩講を勤めることができました。皆さまのお陰で、親鸞聖人が往生されて七百年以上経つてなお、相続され続けてきた南無阿弥陀仏の、お念仏のみ教えが、相続されていく…。法の相続者、川の流れのように途絶えることなく続く、先を受け継ぎ後に伝える継承者のつとめがつとまつてゆくのであります。



## 仏教婦人会研修旅行

神戸別院仏教婦人会、今年の研修旅行は好天に恵まりました。行程は神戸別院前八時出発、誕生寺を経て湯郷グランドホテルで昼食、閑谷学校、備前陶芸美術館、神戸別院前解散です。

日常を離れて車中の人となれば、会員みな少し若返ったかのよう、たちまちお喋りの花が咲きその賑やかなこと、いつの間にか法然聖人誕生寺到着。

すぐに座敷に通され御住職からお寺にまつわるお話を伺い、本堂で読經のあと法然様の御両親熊谷直実の御影を見学して、縁側から法楽園とい



休憩所でアイスをペロリ☆(閑谷学校にて)

われるお庭を拝見しました。

四季それぞれの美しさがあるのでしようが、草一本生えてなく手入れされたお庭、そこですれ違ったお二人はご奉仕の方でしょうか、会釈を返して下さったそのお顔の穏やかなこと、謙虚でしかも温かさの溢れたお顔は今も臉に残っています。あのような方達に支えられてお寺は守られていくのでしょうか。

昼食後は再びバスで、かねてよりあこがれの閑谷学校到着、その地に立った感動は言葉ではとても表すことができません。学校の敷地を一周すると云われる蒲鉾型の石塀はなだらかにどこまでも続き、時間の都合もあり見学の場所は限られましたが花頭窓を通して入る光を写した講堂の床は塵一つなく、かつての秀才達が正座して学問に励んでいた姿を想像すると、物質的に恵まれなにも不自由なく過ごしている今の学生とどちらが幸せかと比べてみても簡単に答えが出る筈もないと思ったことでした。

池田光正公という名君を得てこの地に根付く創学の精神は今も『和氣閑谷高等学校 青少年教育センター 閑谷学校』と引き継がれ「三歩下がって師の影を踏まず」「師のお墓のうし

ろに光政公は自分のお墓を師よりも小さく建てさせた」等私の生半かな知識など何処かに飛んでしまう位、三百五十年もの伝統に培われたこの閑谷の地は圧巻でした。その後備前陶芸美術館を見学し帰路につきました。

神戸別院に着く頃はすっかり日も暮れて暗くなっていました、誰一人として疲れた顔もなく充実した一日でした。

この度の旅行を実現させて頂きました別院や、同行の担当職員の方々にも心から御礼申します。 合掌

(別院仏教婦人会会長/MK)

### 子ども会より



### 阿弥陀様って？

今回の子ども会のお話はみんなが阿弥陀様について考えてみました。

「みんなが思う、阿弥陀様ってどんな方？」

「みんなを守ってくれる人」「あたたかくて大きい人」などなど、子どもたちからは様々な答えが返ってきました。

人は生きていくなかで思い通りに

ならないことがたくさんあります。楽しいことより、もしかしたら辛いこと、悲しいことの方が多くありません。

だからといって自分の周りの人にイライラした気持ちをぶついたりしても、何にもならないことはみんな知っています。

阿弥陀様は、みんなが辛くて悲しくて涙を流している時には「辛かったなあ」「悲しかったなあ」と一緒に涙を流してください。

また、みんなが嬉しいこと、楽しいことがあった時には同じ様に「本当によかったなあ」と心からよろこんでくださります。

阿弥陀様は世界中の人々誰もが、よろこびにあふれるいのちとなるように、大きなあたたかい光で包んでくださるお方なのです。そうしたあたたかい光、阿弥陀様の優しさ『大悲』の中に包まれている、と気付かされたならば、私も阿弥陀様の様な、本当の優しさをもつて人と接することのできる方になっていけるのではないのでしょうか？

阿弥陀様のお慈悲の光に包まれて、心優しい『ほとけの子』が一人でも多くなることを切に願った一日でした。

(別院子ども会担当/AI)

# 新門様、6月17日 神戸別院ご巡回

ご勝縁にあわせて『<sup>き きょう しき</sup>帰敬式』

親鸞聖人七五〇回大遠忌の、お待ち受け機運の高揚とご法要の円成を期して、次代の法灯を継承される新門様が、全国の直属寺院をご巡回され、僧侶・門信徒との交流を通して、さらなる宗門の発展を期する機縁として、六月十七日、神戸別院をご巡拝されることになりました。

この度の、新門様のご巡回のご勝縁にあわせて、新門様お導師による『帰敬式』を神戸別院にて執行いたしますので、受式を希望される方のお申込をお待ちいたしております。

◆期日／二〇〇九年(平成二十一年)六月十七日(水) ◆時間／午前十一時十五分より ◆場所／本願寺神戸別院本堂(通称…モダン寺) ◆集合時間／午前十時三〇分 ◆集合場所／神戸別院三階総会所 ◆申込み期限／平成二十一年六月一日(月)／内願法名希望者…平成二十一年四月十七日(金) ◆※内願とは、いただく法名の字を前もって本山にお願いし許可をいただくことです ◆定員／先着一〇〇名 ◆申込み方法／電話・FAX・封書または葉書にて。お名前・フリガナ・ご住所・電話番号・生年月日・年齢をお伝えください(西本願寺ホームページから印刷された、所定の帰敬式申込用紙でもお申込いただけます) ◆※但し、内願申込みはFAX不可 ◆受式冥加金／成人…一万円、未成年…五千円(冥加金は当日受付にて承ります) ◆※内願懇志二万円以上(冥加金とは別途必要) ◆その他／式章・念珠は当日お配りいたします ◆※式は椅子席での執行となります ◆申込み先／〒六五〇一〇〇一一 神戸市中央区下山手通八―一 本願寺神戸別院帰敬式係宛 電話(〇七八)三四一―五九四九 FAX(〇七八)一二四一―八五二六

## 納骨所受付中

この度、神戸別院及び兵庫教区教務所において、育成施設や研修室の増設工事が始まり、来年早々の完成を予定しております。

増築に伴い、予てより別院門信徒などの要望がありました、納骨所も拡張する事となり、九月末日までを『事前申込み特例期間』として、使用



増設される納骨所(イメージ)

申し込みの受付を致します。

浄土真宗本願寺派の門信徒で納骨所を探しておられる方だけでなく、現在の墓地が遠方で「気軽にお墓参りができない」と不安に思っておられる方や、神戸市内に引っ越してこれたご親戚の方などにもお勧め頂ければ幸いです。

また、特例期間内に納骨所使用懇志(一家分二百五十万円以上)をご進納いただいた方には、使用懇志の減免(十万円)、年次維持冥加金(年間一万円)を二年間免除致します。

特例期間は、平成二十一年(二〇〇九年)九月三十日まででございます。

当別院二階事務所には、納骨所見本も設置していますので、ご来院頂きご検討下さい。

納骨所の説明、申し込み書類の請求等、詳しくは当別院納骨所係までお問い合わせ下さい。

【電話(〇七八)三四一―五九四九】

(納骨所担当/森)



納骨所(一家分)